

周作人の『草木虫魚』シリーズ ——鳥獸虫魚小品

呉紅華

論文摘要：本文主要针对周作人于不同时期所撰写的三篇鸟兽虫鱼小品文——《苍蝇》（1924）、《金鱼》（1930）、《赋得猫一猫与巫术》（1937）进行细致文本梳理基础上，结合其留日时期的学术源脉，探讨周作人在不同时期的文坛背景下是如何通过围绕草木虫鱼题材对中国现代散文发展中的“怎么写？写什么？”这一问题进行探索与实践的，凸显出周作人文学中存在着一一条站在生物学的角度去检点文化史、反思人生美学思想的文学主线。

关键词：周作人《苍蝇》《金鱼》《赋得猫》鸟兽虫鱼小品

周氏三兄弟は小さい時から草木や虫魚などが好きで、周作人は多くの文章に幼少期に読んだ『毛詩草木鳥獸虫魚疏』『南方草木状』『本草』『花鏡』『格致鏡原』『毛詩品物図考』などに触れている。それらの書物はみな中国の動植物、薬草、農業園芸などの事項を記録する博物類の名著である。長兄魯迅は1922年童話風小説「兔と猫」「鴨の喜劇」を書いており、散文には「夏三虫」「狗・猫・鼠」「春末閑談」がある。1926年に書いた「百草園から三味書屋まで」には昆虫13種類、草木6種にも触れながら、紹興の実家や塾の裏庭で遊んだ情景を生き生きと描写し、国語教科書にも採用された名文である。弟の周建人は生物を学び、長い間上海商務印書館で科学普及書籍の執筆編集の仕事に従事

した。1935年に創刊され、科学の大衆化と科学小品を提唱した雑誌『太白』に多くの昆虫類の科学小品を執筆している。

当然、先行研究には周作人の科学や博物学関連の小品文にふれた論述も少なくなかった¹。注意すべきことは周作人本人が自分の小品文を科学小品に分類していないこと、および1930年に書いた『草木虫魚』シリーズ7篇は科学小品流行の前に書かれたものだという点である。その先取りの感性は幼少期に愛読した前出の『毛詩草木鳥獸虫魚疏』などの古典書籍に由来し、また日本の随筆作家薄田泣菫に1929年出版した同名の随筆集『草木虫魚』があることから、日本経由の流行思潮からもヒントをもらったかもしれない。

本論は先行研究を参考しつつ、『草木虫魚』シリーズの執筆動機と日本との関連性、創作態度などを詳細に考察し、周作人文学に見え隠れする生物学的着眼による中国文明批評と文学審美思想を見直す彼の文学的特徴を浮き彫りにしたい。

一、中国で最初のファーブル『昆虫記』紹介

周作人は留学期に日本の児童教育学や童話学の研究発展に注目し²、魯迅と兄弟で共訳した『域外小説集』（1909年）にアンデルセンやワイルドの童話を選録している。立教大学で古典ギリシア語を履修し、東京上野図書館で最も古い『イソップ寓言』の明代の訳書『意拾蒙引』を発見した³。同時期に周作人は高島平三郎編集の『児童を謳へる文学』中の児童生活を描いた俳句川柳及び随筆に接し、そこから日本の俳句や川柳に深い興味を持ったと同時に、特に小

1 庄萱「科学小品：詩と科学的融合—周作人散文文類“新変”之一」『福建師範大学学报・哲学社会科学版』2010年第1期 P116-121；韓連慶「細校虫魚過一生—周作人的博物学」『読書』2013年第5期 P141-146

2 拙論「周作人と明治大正時期の日本児童学——高島平三郎からの受容を手掛かりに」九州産業大学『国際文化学部紀要』第68号 2017年12月

3 周作人「明代の訳書『イソップ寓言』」『語絲』第49期 1925年10月19日

林一茶が詠んだ“すべての生物を友とする”主題の俳句に注目し、一茶の昆虫を詠む俳句に惹かれたという⁴。

1911年周作人は日本留学を終え、故郷の紹興に戻った。故郷では英語を教えながら、童謡童話民話伝説の収集を呼びかけ、魯迅と地元先人の著作を収集・整理していた。これらの経歴と蓄積により、1917年周作人は北京大学の文科教授となり、欧州文学史を講義するようになった。そして活躍の場にも恵まれ、『新青年』『毎週評論』『語絲』などに数多くの文学評論を発表し、大量の外国名作を翻訳紹介して、一躍著名な文芸理論家、翻訳家、五四新文学運動のリーダー格の唱道者になった。

『周作人日記』の1923年から1924年までの購入図書リストを見ると、多くの生物学、昆虫学の著作を購入していることがわかる。ちょうど日本留学期にアンデルセン、ワイルド童話をいち早く中国に紹介したと同じように、実はフェアブルの『昆虫記』も周作人が1923年はじめて中国に紹介したのである。『晨报副鐫』（1月26日）に「フェアブルの『昆虫記』」の文章を発表している。文章の冒頭部分に周作人は自身が入手したフェアブル関連の英訳と日訳の書籍を紹介しているが、その中で特に大杉栄訳の『昆虫記』に触れている。この大杉栄訳の『昆虫記』（I）は1922年の秋に出版されたばかりだった⁵。

フェアブルの『昆虫記』について、周作人は次のように評価している⁶。

法布耳的书中所讲的是昆虫的生活，但我们读了却觉得比看那些无聊的小说戏剧更有趣味，更有意义。他不去做解剖和分类的工夫，（普通的昆虫学里已经说的够了），却用了观察与试验的方法，实地的纪录昆虫的生活现象、本能和习性之不可思议的神妙与愚蒙。我们看了小说戏剧中所描写的同

4 周作人「一茶の俳句」『小説月報』12巻11号 1921年11月10日

5 大杉栄訳『昆虫記』I 叢文閣 1922年

6 周作人「フェアブル『昆虫記』」『晨报副鐫』1923年1月26日

类的運命，受到深切的銘感，現在見了昆虫界的這些悲喜劇，彷彿是聽說遠親一的确是很遠的遠親一的消息，正是一樣的迫切的動心，令人想起種種事情來。他的敘述，又特別有藝術的趣味，更使他不愧有昆虫的史詩之稱。（ファーブルが本の中で述べたのは昆虫の生活であるが、私たちは読んでそこらのつまらない小説や演劇よりも面白く、意義があると感じる。彼は解剖や分類を行わず（それらは普通の昆虫学においてすでに話し尽くしている）、観察や実験の方法を用いて、実際の現場で昆虫の生活現象、本能、習性の想像もできないような素晴らしいと愚かさを記録した。私たちは小説や演劇に描かれた同類の運命を見て深い感銘をうけるものだが、いま昆虫界のこれらの悲喜劇を見るとまるで遠い親戚（確かにとても遠い親戚）の消息を聞いたような気がする。まさに同じように切実に心を動かされ、様々なことを思い出されるのである。彼の書き方には特に文学的なおもむきがあり、それが一層ファーブルの書を昆虫の史詩の名に恥じないものにするのである。）

1923年はちょうどファーブル誕生100周年に当たり、この偉大な科学者と詩人を記念するために周作人は6月25日の『婦人雑誌』に英訳から重訳したファーブルの伝記「昆虫を愛する少年」を発表した。またその年の夏休みには童話や児童劇、動物故事を翻訳し、『土之盤筵』の翻訳連載を綴った。紹興時代に書いた「童話研究」などの諸論文は発表当時反響がなかったが、この時期になると、中国文壇に児童文学ブーム到来を先導したとして注目を集めた。周作人はまた1918年鈴木三重吉創刊の『赤い鳥』児童文芸雑誌、及び日本著名な作家が子供のために書いた各種の童話小説にも注目し、文芸評論を書く間にこれらの数多くの童話劇や動物故事などを選んで訳した。

連載の中にはファーブルやトムソンなどが書いた昆虫故事四編を組み入れた。その四編中の「蝙蝠とヒルガエル」「蜂と赤蟻」の訳文付記には、本来の

大杉訳の『自然科学の話』から蝙蝠、ハリネズミ、もぐら、ヒルガエルの四種類の生物から蝙蝠とヒルガエルを訳し、フェアブル本にある蜂、猫と赤蟻の帰巢本能を持つものからは蜂と赤蟻を訳していて、モグラと猫は割愛した。割愛した理由は後に「モグラを語る」⁷「賦得猫」「猫の喧嘩」で明らかにしている。つまり1923年翻訳をした時点から時間があれば改めてモグラと猫に関するものを書こうと考えていたからである。

二、「蒼蠅」

まず『晨报副鐫』（1924年7月13日）に発表した「蒼蠅」を見てみよう。

蠅という題材は、1921年以前に周作人が訳した外国の詩や書いた自由詩にすでに現れていて、例えば千家元磨の「蠅」、ウイリアム・ブレイクの“The fly”があるほか、周作人自身にも「蠅」という題名の自由詩がある。散文に昆虫を書き入れたのは1921年の「一茶の俳句」からである。また同年の6月に寄稿した「山中雑信」その二、三、四の連作にも蠅、虱、蚊、鶏、鳥などを書き込んでいる。そして1924年「蒼蠅」と前後に書いた「苦雨」には蛙の様子と子供達の水遊びを生き生きと描写した一段を本文に挿入している。しかしこの「蒼蠅」を書くまではまだ昆虫が主役の文章ではなく、長文の描写を文中に挿入する描写法（書き割り）を取り入れていることが確認できる。要するに、昆虫を主役にし、全編昆虫などの生き物を書いたのは1924年7月に発表した「蒼蠅」からである。

ところで、日本文学中の自然風景の発見、つまり草や木などの自然が主役に躍り出ることであるのだが、それは、「本草学」がブームになっていた明治三十年初めのことである⁸。国木田独步の『武蔵野』（1901年）は、近代日本の

7 周吉宜「周作人と楊柳風」『新文学史料』2016年第2期、周作人「談土撥鼠」『北平晨报』1935年11月29日

自然描写の手法を確立し発展させた手本と言っていい。だが、『武蔵野』はまだあくまで自然を見る主体の眼差しで描写が行われているに過ぎない。それに対し、長塚節の『土』は、見られる客体、すなわち自然そのものが主題になっている。また薄田泣菫の物を詠んだ詩（周作人は彼の『草木虫魚』『茶話』などを例に挙げている）や島崎藤村の生物学的観察眼で書かれた小諸の自然などのように、近代自然科学の眼差しを獲得した主体が自然描写のレベルを押し上げていった。昆虫を作品に多く書き入れた作家には小林一茶の俳句、近代では正岡子規のオムニバス形式の「蝶」、小泉八雲の『虫の文学』があり、『ほどとぎす』などの雑誌にも昆虫関連の作品や挿絵が20年代に多く登場する。「蒼蠅」の執筆は日本文壇のこのような趣向と無関係ではない。ただ周作人は「蒼蠅」の付記にルキアノスの「蒼蠅賛美」⁹を読んで興味深く感じ、その影響を受けたと付け加えている。

偶读路吉阿诺斯的《苍蝇颂》，觉得颇有趣味，但要翻译它，又太懒惰了，提不起精神来在十目所视十手所指（众目睽睽）之下作烦难的工作。过了几天之后，拿起笔来写这一篇，并不是模拟古人，虽然受着他一点影响，所以在文章上是一个“四不相”，不能说是什么体，只好算它是“赋得苍蝇”罢了。（たまたまルキアノスの「蒼蠅賛美」を読み、とても興味深く感じた。訳そうとしたが、怠けてしまい、多くの人に見られる中での面倒臭い仕事をする気にはならなかった。何日か経ち、また筆を持ちこの一篇を書いた。古人を模倣するというわけではないが、彼の影響は少し受けていて、そのため文章は「四不相」（特異）ではあるけれども、何の文体かはなかなか説明しにくく、やむを得ずそれを「賦得蒼蠅」にしておこう。）

8 新保邦寛「自然描写の近代—昆虫文学史の試み」『国語と国文学』東京大学国語国文学会編、平成22年12月号P1-17

9 ルキアノスの「蒼蠅賛美」は周作人が晩年全文を訳し、蠅の題材に注目していた。

ここでいう「賦得」は科挙試験の“応題賦詩”のことであり、つまり詩題に沿って詩や文を書くスタイルのことである。周作人はこれらの科挙用文体（八股文）や政治道徳のために書いた文章を載道派の文学として批判している。ここではそれを逆用している。「蒼蠅」は自選集に何度も組み入れたお気に入りの文章であり、一種の新しい文体として提示しているのは言うまでもない。

「蒼蠅」冒頭では、現代の科学知識では蒼蠅は病原菌をもたらすものとして嫌われるが、子供達には絶好の遊び相手であると書き出し、古典ギリシアの史詩、伝説、賛美歌、ファーブルの『昆虫記』、日本及び中国古典の関連出典史料、民間俗謡などを引用し、巧みに按排・調理して、幼少期に蠅を弄んだ懐かしい「戯棍」という遊びを加えた。文章には当時日本文壇に流行したノスタルジックな童心を含み、その温かい心で情と理の衝突を語り、最後にはそれらの日本やギリシアの作品に表現される柔軟性や包容力、特に小林一茶の蠅に対する寛容な心で自身が五四退潮期に直面した精神的な矛盾を超越しようとした。

この作品は、科学童話でも科学小説でもなく、一種のノスタルジアを交えた中国や日本、ギリシアの文学における蠅の生態や文学的なイメージを描いた情感豊かな洒落た美文である。

晩年に書いた『児童雑事詩詩集』にも蠅の詩「瓜皮满地緑沉沉，桂樹中庭有午蔭。躡足低頭忙奔走，捉來幾只活蒼蠅」（緑が深まる真夏の中庭に、食べ終わったスイカの皮を散かしたまま、桂の木が茂る日陰で子供らが声を潜めて走り回り、飛んでいる何匹かの蠅を夢中になって捉えている。）がある。以上から、同じ蠅の題材を、周作人は自由詩、散文、雑事詩の各文体を用いて描いたことが分かる。自由詩は蠅を「美の破壊者」として呪詛し、散文では蠅と遊んだ子供時代の天真爛漫な童心を回想しながら、情と理の調和と矛盾を語り、雑事詩の蠅は子供の遊ぶ情景を書いた夏の風物詩に仕上げている。その筆さばきはさすがである。

三、「金魚」

1929年末、周作人は最愛の娘若子を失い、あまりの無念さに、主治医山本医師の誤診殺人を弾劾した。この出来事で数か月も文章を書けなかったという。周作人は人の喜怒哀楽の感情を言葉で表現できないことを痛感した¹⁰。一方、二十年代後期、軍閥の強圧政策や、左翼文学が台頭し、徐々に中国の主要な文芸陣地を占めつつあった。左翼陣営の覇権的な言論、国民党政府の抑圧政策に対して周作人は公私いずれの立場でも言葉の限界、表現の難しさを深く感じていた。数ヶ月の異例の沈黙を経て、3月10日にやっと重い筆を持ちこの「金魚」を書いたのである。この文章は発表されるや、すぐに左翼青年らから革命文学を揶揄する時代遅れのものとして非難を浴びせられた。周作人は直接反論せず、ただ執筆の日時について説明しただけだった。一年後、この「金魚」と、後に書いた「『草木虫魚』小引」、「虱」、「二株の木」と合わせて4篇を「草木虫魚」の総タイトルで『青年界』の創刊号に発表し、自身の文学主張と創作態度を示した。

「金魚」の文末付記¹¹にはA・A・ミルンの同名の小品をまねて書いたと述べている。ミルンの「金魚」は、主に屋外の池の金魚と室内のガラス缶に飼われた金魚の餌や生存環境の比較や退屈さについて書かれたエッセイである。周作人はそこからモチーフを得て書いたという。周作人の文章はやや異色で、常套の引用がほとんどなく、自然段落の五段からできた叙事的な評論文になっている。

第一段落は「金魚」を書くきっかけ、第二段落は金魚が結局有産階級の貴人に飼われる運命。一貫して主張する「鳥身自為主」の観点と呼応している。第

10 周作人「中国新文学の源流」1932年2-4月 輔仁大学の講演録

11 周作人「金魚」『青年界』創刊号 1931年3月10日

三段落は「意識の流れ」の手法で金魚の赤から中国の赤い花嫁姿を連想し、「赤」を一種の広告塔のような露骨表現とし、肉体を傷つけるまでの美の追求の纏足を引き合いに出し、人類に改造された金魚がどうしても好きになれないとしている。第四段落は鮒（フナ、金魚の前身）が池に“見えつ隠れつする”婉曲的な情景が自分好みの文学の描写だという。更に同じ金魚科の鮠（ハヤ）が「時に驚いたのか、急に身を翻して逃げれば逃げたで、銀光の眼を射るところもまたよく水中の活気を増すのである」と書く。ここから周作人の文芸的美学の好みがわかるが、つまり左翼作家のような宣伝式、攻撃的で派手な表現や論争ではなく、平凡で簡潔な日常生活、文字上は節制した言葉遣いがよいとする。また鮠みたいに水界を驚かせる活気も平淡の中に変化をもたらし、1922年日本の川柳俳句を評価した時に言った「その消えてはまた現れる一瞬の切実な情感を惜しむ」¹²と同じように、ここの「平凡の中の変化」を大切にする日本的な情緒を彼は美的感覚として重視している。その他にも「喝茶」に紹介した日本美意識の一つ「わびさび」の茶道芸術も周作人は愛してやまなかった。

『草木虫魚』シリーズの二作目「虱」は「蒼蠅」系統を継いで文化人類学の叙述に偏る。そのほかに昆虫小品ではない異なる文章が二篇ある。一篇は「水の中の物」、水中の河水鬼、つまり日本の河童の事を書いている。生物学よりは民俗学の内容である。もう一篇は「案山子」、水田の藁人形を考証したものである。周作人はこの河水鬼と農業にかかわるカガシの文章を『草木虫魚』シリーズに編入していた。

三十年代中期は大衆化問題と科学普及教育の文章が盛んに発表される時期である。それらを提唱する雑誌『太白』が創刊されたが、この雑誌は科学小品欄を設け、周建人らの科学小品を毎回登載した。周作人は自身の草木虫魚作品を科学小品とは言わなかった。

12 周作人『小詩を論ず』『晨报副鐫』1922年6月21・22日

ただ1935年4月に郭沫若翻訳のH・G ウェールズ著『生命の科学』のために書評を書いた時に「科学小品」という題目の文章を書いてその定義を定めた。科学小品とはつまり科学に関する内容であり、文章が美しいものと主張し、またいい科学小品の模範文としてホワイト、ファーブル、そしてトムソンの文章を例に挙げている。特に『昆虫記』はいかなる聖典伝記にも勝って青年が必読すべき有益な本だと言っている。西洋の書籍『ヌルボン自然誌』や『動物生活の秘密』などだけではなく、それらに触発されて中国の古典からも素材を収集していた。中には鳥獣虫魚関連の李元『蠕範』、銭步曾『百廿蟲吟』、郝懿行『記海錯』、陶弘景『本草注』と汪曰慎『湖雅』、段柯古『西陽雜俎』、謝在杭『五雜俎』、孫仲容『与友人論動物学書』などがあり、それらに一定の評価を下している。

自ら集めた上記の書籍以外に、周作人は柳田国男の『遠野物語』、佐々木喜善の『聴耳草紙』、早川孝太郎の『猪鹿狸』¹³などの日本の郷土研究著書を紹介し、これらの学術書の書評を『夜読抄』に集めている。これらの書物は動物生活を描いているが、明らかに動物学ではなく民俗学の範疇である。叙述内容は単純の動物観察記録ではなく、人と獣、寒村・猟師と獣との関係を記録した研究書である。これらの文章を紹介したことから周作人の興味の対象は自然科学の概観だけではなく、自然科学と人間生活の関係性の人文哲学のレベルまで高まっている。

「水の中の物」「案山子」二作のようなやや異質的な文章は草木虫魚題材から開拓され深められてきたものであり、また日本の郷土研究の哲学に触発されて書かれたものでもある。それだけでなくこの時期に編集した『夜読抄』は全体的に見ると、その多くは草木虫魚を書くために中外古今から集められた文献を

13 周作人「猪鹿狸」『大公報・文芸副刊』第1期 1933年9月23日 早川孝太郎の著作である。周作人の『夜読抄』には柳田国男『遠野物語』佐々木喜善『聴耳草紙』の紹介文も収録し、周作人が日本郷土研究に注目した結晶である。

駆使して描いた読書筆記である。要するにこの種の叙述主題の創作はその時期の周作人に創作混迷期を脱出させた作業でもある。このように周作人は「何も書けず」の困難な創作環境から「何でも書ける」自由な創作空間を手に入れて創作の新天地を切り開くまでになったのである。

四、「賦得猫一猫と巫術」

1937年に周作人は猫を主題にした「賦得猫」を書き、「猫と巫術」という論文風のサブタイトルを付けた。この文章は科学小品でも民俗小品でもなく、宗教や政治を論ずる論文風文章、前出の『昆虫故事』で触れた三種の帰巢本能動物の一つ猫を改めて書いたものである。猫についてはずっと気に掛けていた。しかし何を書くか、どう書くか悩んでいた。『草木虫魚』シリーズを発表した後、弟子の兪平伯との往復書簡に猫のことを書く悩みを告白している。つまりこの文章はずっと周作人が温めてきたテーマであり、書くきっかけを待っていた。

長い時間をかけて大量の史料を読んだ上で、最後に『夜談随録・夜星子』の奇怪故事を例に選び、まずオバと猫の関係を論証し、その本質は原始宗教の巫術を使った犯罪にすぎず、猫はただオバが飼育し使っているだけであることを明らかにした。そしてさらに一步進めて、民俗学と文化人類学の見地から出發して論証を行い、最後に西洋の巫術犯罪から中国の文字獄、思想獄に連想を及ぼし、西洋の巫術妖術の宗教的残忍性への批判に基づいて、問題を中国の文字獄、思想獄の政治迫害にまで拡大して論じている。

周作人は「賦得猫」としたが、着実な学術論文のようであり、また1935年に書いた「生き埋めについて」、1945年の「無声老母の消息」と同じく中後期に代表する新しいスタイルの散文、新型の学術美文でもある。

草木虫魚題材は1930年以降ずっと周作人文学創作の重要な内容であった。1935年の「ふくろう」は周作人自身の定義通りの科学小品である。『苦茶随筆』

をまとめた時に「科学小品」の次に置かれた一篇で、フクロウの今までの記録の常識を覆した実証文である。1936年には「青虫と螢」、1944年と1945年には「蚯蚓」「螢」、また野生の果実を描いた「紅姑娘について」がある。これらは周作人自身も『草木虫魚』シリーズの続作としている。文体の実践として、序跋体「モグラを語る」、書簡体「蝙蝠について」、筆記体「野草の俗名」、語録体「落花生」等各種の文体を試作し、探索していた。

五、自然之倫理化¹⁴

では、周作人はなぜ長年これらの鳥獣虫魚の題材を書き続けていたのか？1919年に書いた「祖先崇拜」¹⁵からその手掛かりと根拠を見つけることができる。

我不信世上有一部经典，可以千百年来当做人类的教训的，只有记载生物的生活现象的 biologie（生物学）才可供我们参考，定人类行动的标准。（私はこの世に千百年来ずっと人類の教訓に得た經典が存在するとは信じない。ただ生き物の生活現象を記録する生物学こそが私たちが参考にでき、人類行動の基準を定めることができる。）

周作人は『昆虫記』を人類の聖典とし、生物だけが人の生活を検証する基本基準だという。彼は、この基準を使って、西洋と日本の近代科学や文化知識によって中国文化を点検するなら、中国人が自然観察に劣ることを発見すると考える。1936年「青虫と螢」¹⁶でこう指摘している。

14 周作人「夢想之一」『苦口甘口』所収 『周作人自編文集』河北教育出版社 2002年1月

15 周作人「祖先崇拜」『每週評論』1919年2月23日 『談虎集』所収

16 周作人「螟蛉和螢火」『青年界』第9巻3号 1936年1月14日作

中国人拙于观察自然，往往喜欢去把他和人事连接在一起，最显著的例，第一是儒教化，乌反哺，羔羊跪乳，或泉（鸱鸒）食母，都一一加以伦理的解说。第二是道教化，如桑虫化为果蠃，腐草化为萤，这恰似“仙人变形”，与六道轮回又自不同。（中国人は自然観察が苦手で、よく自然を人や事と関連付けることが好きである。もっとも顕著な例は、第一に儒教化することである。カラスの母鳥への恩返し、子羊が跪いて乳を飲むこと、フクロウが成長すると母鳥を食べるなど、いちいち儒教倫理で解説を加える。第二は道教化することである。例えば桑蟲から果蠃（細腰蜂）に化すること、腐った草から螢が生まれることなど、これが「仙人の変身」のようであり、六道の輪廻とはまた異なることである。）

周作人は中国伝統文化中の儒教化され、道教化された倫理思想をもとのありのままの自然に還元しなければならないと考え、倫理化された中国の思想の自然化という問題を導き出した。彼はまた、昔の読書人は知恵や力を道徳と科挙試験に過度に費やし、『詩経』や「爾雅」、医学書の『本草』などに動植物への考察を書き残しはしたものの、それを専門の科学に作り上げるには遥かに遠かったと考えた。

そのことから彼は特に文献の注釈を重要視し、翻訳注釈に特に努力を払っている。周作人は中国古典の名著と言われる経典の草木虫魚の注釈を点検していく中で、本文よりも注釈が重要であることや、正統の文人におろそかにされてきた歴代の鳥獣虫魚の箋注本を細かくチェックする意義に気づき、一生かけて虫魚の記述を細かく校正した。また外国文学を翻訳するときに、大量の注釈に時間をかけるこだわりも、『草木虫魚』シリーズを再読すれば、周作人の文学批評の真髓が理解でき説明もできる。

このように、周作人は一生草木虫魚の創作を続けてきた。まさに「細校虫魚過一生」である。以上三篇はそれぞれ違う時期に書かれたものだが、みな鳥獣

虫魚のことを書いている。それらは勝手にタイトルを決めて、何を切り口にするかを工夫し、点から面にひろげる、まさに「賦得」を逆手に取った書き方である。その内容は、小さな蠅から大きな宇宙の問題にまで及び、ともに博識と寛容心で紡ぎ出した秀作である。三篇とも各時期の周作人が置かれた社会背景に照らせば、どれも過酷な現実から書ける内容を絞り出し、精巧に創作した美文であり、彼の生物学、文化人類学など学術知識を以て人生観や文学観を表明する文明批評である。

1928年の年末に書いた「妖術について」¹⁷には、直接「文明とはなにか」の問題に触れている。すなわちできるだけ必要のない犠牲と衝突を減らすことである。我々の祖先が野蛮である故は彼らには過度な必要でない犠牲と衝突があったからだというのである。この思想は周作人の重要な美学である。五年半の留日生活は日本と不思議な縁を結んだ。日本との関係上でもこのような思想が働いていないだろうか？文学は本来理想と現実の調和できないジレンマを表現することであり、周作人の文学理想と彼の直面する現実の間違いなく個人では解決できない矛盾である。だからこそ平和な時期に生きる我々にとって、周作人の文学が湛えるこのような苦渋に満ちた味わいへのこだわりは、文学鑑賞の域にのみ留めておくべきではない。彼の文学が内包する美学的理想は今でもその現実性と参考性を失っていないと思うからである。

17 周作人「関与妖術」1928年12月27日『永日集』所収 河北教育出版社 2002年1月